

追悼 クカルキン教授

ソ連モスクワ大学の恒星天文学主任であり、ソ連天文局 (Astronomical Council) の変光星部門の専任者であったクカルキン (Boris Vasilievich Kukarkin) 教授が、さる 1977 年 9 月 15 日に心臓発作のため歿くなられた。享年 69 才であった。同大学のステルンベルグ天文台から帰宅の途中、路上において突然たおれ、そのまま不帰の人となった。

クカルキン教授は変光星・球状星団・恒星系の構造などの分野でめざましい活躍をしたが、何とんでも故パレナゴ教授 (1906-1960) と組んで始めた、クカルキン・パレナゴの変光星カタログの出版は有名である。このカタログは 1948 年以来、IAU の支持の下に 10 年ごとに新版を出し、最近では 1969 年の第 3 版が最も新しい。変光星研究者なら誰でも使う General Catalogue である。1951-58 の間、IAU 第 27 委員会 (変光星) の President、1955-61 の間は IAU の Vice President、をつとめ、1958 年以来英国王立協会の Associate であった。

クカルキンは 1909 年 10 月 30 日今ではゴルキイ (Gorky) 市となった、ニズニー・ノヴゴロド (Nizhny Novgorod) に生まれた。父君は学校教師であった。若くして両親を失い、働きながら勉めという苦学の道を歩んだ。14 才の

頃から天文観測に興味を持ちはじめ、変光星の実視観測を系統的に始めた。勿論、市販の天文教科書による独学から出発した。やがて先ず熟練したアマチュア観測家として知られるようになり、同地方の天文雑誌“変光星”(ニズニー・ノヴゴロド天文学会発行)を発行するようになった。

やがて 1932 年からはモスクワ大学とステルンベルグ天文台で専門の天文学を勉めようになる。とくに、世界各国の天文台での星野写真のファイルを集め、彼自身の 1 万以上の写真観測を合せて、400 個以上の変光星を精力的に詳細にしらべた。その結果は 1949 年に、「変光星研究にもとづく恒星系の構造と進化」という書物になって出版され、これによって彼は 1950 年ソ連科学アカデミーのブレディキン (Bredikhin) 賞を授与された。

1951 年モスクワ大学の教授となり、1952-56 の間は同大学のステルンベルグ天文台の台長、1960 年には故パレナゴ教授の後を継いで天文学主任教授となった。最後の 10 年間に行った球状星団に関する研究をもとに、1974 年著書“球状星団”を発表している。

あとには、同じ天文学者である妻ナタリヤ、息子で数学者のアレクセイ、娘で心理学者のエレナがいる。

クカルキンによって始められた変光星カタログの仕事は彼の死後も、弟子たちによって引継がれ、目下第 4 版の出版が準備中と聞いている。(北村正利、東京天文台)

(前頁から)

に 3 ケ月滞在するためである。ESO は独、仏、オランダ、ベルギー、スウェーデン、デンマークの 6 ケ国が共同で運営している研究所である。事務本部はミュンヘン郊外のガルヒンクに、理論、スカイアトラス、望遠鏡開発部門はジュネーブに、そして天文台自身はチリにある。最近完成した 3.6m 反射鏡が、その自慢である。またシュミット望遠鏡は、先のアングロ・オーストラリア天文台とともに、南天のスカイアトラスを作っている。全体の所長はウォルチェで、その下に多くの部門がある。筆者の知っているところでは、理論部長がパチニ、スカイアトラス部長が、彗星発見で有名なウエストである。

ジュネーブの研究所は、実は欧州原子核研究機構セルンの一角を間借りしている。(近々、ガルヒンクに移転の予定であるが)。セルンはジュネーブの北郊にあり、正にフランス国境の上にまたがっている巨大な研究所である。その自慢は直径 2 km、地下 40 m にある 400 GeV の超陽子シンクロトロンである。それは元々の研究所の外の原野の中に作られており、筆者は近づいたこともない。筆者のいた建物のそばには、28 GeV の加速器があり、近くを通ると巨大な変電器や空調に圧倒される。

ESO はその設備をほとんどセルンにおぶさっている。

宿舍の世話も、愚息の入った幼稚園も、計算センターもセルンのものである。この計算センターは CDC 7600、6500、6400、IBM 370-168 という強力な陣容だ。セルンのいたる所にグラフィックターミナルがそなえられており、しかも 24 時間使えるからありがたい。筆者は滞在中に十分に計算機を楽しませてもらった。休日や夜ともなれば、計算結果は瞬時に帰ってくるので、全くいそがない。夜の更けるのも忘れ 1 時になったこともあった。バスは 12 時までしかないが、アパートは歩いて 20 分程度の所にあるのでかまわない。このアパートも、筆者の今いる公務員宿舍の 2 倍以上の面積はあり、湯もすぐ出るなど豪勢で (西欧では当然だが)、ジュネーブの美しい景色もあいまって、公私ともに生活を大いに楽しませてもらった。

ESO の理論部門は、その固有のスタッフの他に、多くの客員をかかえている。筆者滞在中にもリンドブランド、コントプロス、クリスチャン、シュビーゲルなどが来ていた。彼らと、セルンのカフェテラスで、眼前の山々を眺めながらコーヒーを飲み、討論をしたことはたいへん有益だった。今回の旅行は、研究成果の点よりも、むしろ多くの知人ができたという点の方に成果があったように思う。